
人は神とどうあるべきか？

ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人は神とどうあるべきか？

【Nコード】

N7628Q

【作者名】

ユウ

【あらすじ】

シリアスなことが嫌いなバカと突っ込むことしかできない不器用な少女が異世界に行ってバカ騒ぎをしたり陰謀に立ち向かったりする話です。注意作者は初心者です。厨二病みたいなものも出てきますがまあ生暖かい目で見てください。

序章

「神というものを君たちはどう考えている？」

目の前にいる赤く裾の長い服を着込んだ少年から切り出されたとき私は頭の中ですぐに答えをまとめた。普段はほとんど聞かない言葉、たとえ聴いたとしても一言で一蹴できる言葉であり普段ならば聞き流す道端の石、そのような言葉だ。

私が口を開く前に横にいる少年、黒原が口を開いた。

「どうでもいい、俺はそう思う。」

黒原はどこにでもいる少年だ、見た目はぱっとしない平均的な少年だ。校則に基づいた黒く他の男子生徒から逸脱しない程度のぼさぼさの髪型。顔は中性的であり髪型一つでどちらにでもみえる。黒原の悪い所は空気を読まないことだ、だがここに至るまではその空気のよさがかなり役に立ってはいる、今回にいたってもそうだ。まず先陣を切って質問してくれる。

「なるほど、君たちは本当にこの世界の住人じゃないようだな。」

黒原の言葉を聴いた少年は口に苦笑いを浮かべどう説明したら言いかといわんばかりに頭をかく。

「まずこの世界の常識を教えておこう。そのあと君たちの世界の常識とやらも教えてほしいものだ。」

少年はこちらに背を向けチョークを手取る。少年の手が二つの円を黒板に描き、その中心に道具、主と書く。

「まずこの世界は二つの考えがある。その二つの考えの下に人々の国があり力がある。多少は差があるが大まかなところはその二つの考えの下、人々は考え生活している。」

円をチョークで射す、物と書いた場所をたたき言葉を続ける。

「まず、神を道具として考え使い捨てるGICS。」

そして、と言葉を続け少年は主と書かれた場所に手を置き

「神を主として心身全てを捧げる神機信仰軍。」

二つの円の中心に線を描く。両方の端にくの字を書き矢印とする。この二つは対立している。ことを示すのだろう、神を道具として使う人々と神を主とする人々、この二つは相容れない水と油だ。説明は聞かなくても分かる。

「まあ、僕たちはどちらでもなくどちらでもあるんだがな。」

少年はまたも苦笑しつつ三つ目の文字と線を描く。中心には神人共同学区とある。

「これが僕たちの国だ、その昔二つの国で戦争があって、この国から全てが始まって、大戦で疲弊した人々はここで終戦を誓ったらしい。そしてこの国が生まれた。」

まあ記録が残っていないから、らしいという言葉でしか語れないんだがね。少年はここで言葉を切り再び机につき手を握りあごを乗せこちらを見る。

「さてさてこちらの話はここまでにして君たちはどういう所から来てどういう考えを持っているんだい？一緒に保護された女の子と出会った経緯についても詳しく聞きたいんだが。」

少年は友好的な笑みを浮かべこちらをじっと見据えた。

「私は何も知らない。私自身は何かがあった時間机に突っ伏して寝ていたので、何も知らずに目覚めたら不気味な場所に一人でいましたということだ、だから詳しいことは黒原に聞け、私は全く分からない。」

私は話を黒原に全てを任せることにした。実際に話すのも面倒だし、考えを言葉にするのも苦手だ。その辺は黒原がどうにかしてくれないものかと期待しよう。

「・・・・・・・・えっとですね」

口元に手を当て何かを考えるそぶりを見せる、洞窟のときといい黒原は非常事態のときのみ本当に役に立「授業を受けていたら床に穴が開いて落ちた先は色とりどりの壁に囲まれた洞窟、変な動物に襲われて逃げた先には大きな箱」突然立ち上がり大声でしゃべりだした。

「さてあなたは開けますか？」

黒原は少年を指差し、まくし立てるようにしゃべり続ける。

「開けるでしょう当然、あるのは現状打破の武器か、または人の言葉を喋る伝説の武器でしょうか、我々は期待に胸を膨らませ、そし

て開けました。」

ぐっと力づくよく力説する黒原、ああそういえばこういうやつだった。シリアスな空気になればなるほどその空気を壊しにかかるんだっけコイツは。そう考える私に見向きもせず黒原は話を続ける。

「しかし出てきたのは金髪幼女でした。それも九才ぐらいの可愛らしい少女それが大きな目をこっちに向けて首を傾げるんですよ。可愛くないですかお人形のような子供ですよ、マリンブルーに輝く瞳がこっちをじっと見据えるんですよ。しかしじっと鑑賞している暇はなかった。背後からは怪物が迫ります。我々は少女を抱え走り出しました。」

いやいや横から蹴り飛ばさなかったらいつまでもああしてたでしょう、何嘘まで混ぜてんだコイツ、冷静な部分がツツコミをいれる、そしてバカは話を続ける。

「でまあ時々少女が不快な思いをしないか確かめるために様子を見ていたんですが、目を合わせるたびにニコって笑ってくれてもうわー」でまあこのバカと幼女を引っ張って洞窟の出口まで出て、お前らに保護されて現状に至る、とまあ本当なら阿鼻叫喚の地獄絵図的な話のはずなのだが脚色のおかげでこんな話になってしまったと、この話には嘘70真実30ぐらいの割合であり、実際の企業団体個人には一切係わり合いがありません。以上」

我慢できなくなり顔面に膝蹴りを黒原に叩き込んだせいなのか少年は若干後ろに下がっている。バカはいすにもたれかかり首が後ろに倒れぐったりしている。少年が後ろに下がってるように見えるのはバカの首が見えないことが不気味なだけだろう、決して自分のせいではない。

「とまあ大まかなところはそんなところだ。少年、質問は？」

「い、いえまあ大体现状はおおよそ理解した。まあ後日また話を聞くでしょうが、そういえば言い忘れていたね、僕の名前は祓正義神はらいまさよし人共同学区の生徒会長をしている。適当にあだ名を考えて呼んでくれたまえ。」

「分かった適当な名前を」「はらさん質問！」

いつの間にか復帰したのか黒原が立ち上がり大きく手を伸ばしている。

「はい、なんだい黒原君」

「はらはさんは俺らより年上？それとも同年？やっぱり生徒会って権力持ってるのか！」

「今年で17だな、君たちと同じぐらいじゃないかと思うんだが。あと僕自身は権力は持ってないな。ここはそういうのがルールなんだし。」

祓は素晴らしい残し扉をあけ出て行った。勝手にしまった扉を尻目に祓の後姿を思い出す。私たちと同じ年で私たちが想像できない苦労をしているんだろうな、横にいるバカとは大違いだ。そんなことを私は考えていると戸を叩く音がした。

「失礼します。」

入ってきた瞬間、黒原はまたも叫びだした。

「メイドだぜメイド、銀髪ストレートの。最高じゃねえか。しかも羽根までついてるぜ。」

見れば確かに人形のような少女だ、金髪幼女とは違い完成された美しさがある。さらにいえば背中には一対の巨大なブースターのようなものが浮いている。しかしまあ洞窟で出会った幼女や祓、このメイドといい金髪や銀髪が多いな。

「お部屋が用意できたのでついてきてください。」

メイドは言葉とともにお辞儀をする。やっぱり本職は違うねえとかメイド服もなかなか可愛いかもしれない、などほかの事を考える前に足が動き、

「金屋もこっち来いよ、ねえねえメイドさああああ」

いつの間にかメイドさんに近づきちよっかい出そうとするバカにとび蹴りを叩き込むことだった。

序章（後書き）

というわけで一応書き終えました。ご感想待っています。

1話

メイドさんはこちらを振り返らずに長い廊下を歩き一つの扉の前にたどり着く。

部屋に入り窓に駆け寄っていくバカをチラッと見て、この部屋に案内してくれたメイドさんに目を移す。

人は会話をすれば色々の特徴がつかめるというがこの人はどういう人種なんだろうか？背中に翼がある時点でまともとは言いがたい。いやだが人を外見だけで判断するのはいかなものか？

「ふむ、なるほど、なるほど。大方の事情は理解しました。つまりこちらの方はロリだけでなく美少女全員が好きで好きでたまらないスケベでバカな野郎なのですね、了解了解」

おいおいまともかと思っただけきつい事言うメイドさんだな。いや待て考えてみればまともなツツコミを入れる人材が増えたって事でいいんじゃない？メイドさんがきつい事言っただけ私が殴る、これはいい構図なのではないのか？

「で、こちらの方はあまりのDVで現在バツ一な独身人妻なのですね、分かりました分かりました。」

「おいコラ、なんだその情報、どっから聞いたかそういうことになるんだよ。」

最近怒りやすくなっていることは自覚している、だが今の台詞だけは見過ごすことはできない。メイドさんはこちらの言葉に何か違うところでもあるのかと首をかしげて見せる。その仕草に私は心のそこから反論する。

「誰がバツ一人な妻だ、私はまだあんまりエロな事には手え出していない高校生だ。」

「暴力的って意味は否定しないんだ。」

ぼそって黒原がつぶやいた気がするが今はこちらのほうが最優先事項だ、目の前にあるテーブルを強く叩く。

「大体よお出会って五分でそんな情報を知ってたんだ、さっきの話を盗聴でもしてんのか。家政婦は見た、ならぬメイドは見たってか、オイ」

「その言葉に関しては否定しましょう、目下盗聴中です。」

「はぁ？何言ってるんだお「ケンカ？」」

怒鳴り声の間にか細い小さな声が割って入る。先ほど私たちが入ってきた扉を見ると、翼がない、至って普通なメイドさんが洞窟で懷いてきた金髪少女を連れていた。

「ほほう、あれが先ほど議題に挙げられた子供ですか、中々に可愛らしい。」

「ケンカしてるの？」

もう一度小さな声でつぶやくその目は微妙に涙ぐんでいる。罪悪感に襲われる私、そしてその私を、いけないんだ、いけないんだ泣かしてやんの。という冷たい目線を送ってくるメイドさん。あれえ？火に油注いだのはそっちだろうに何で私だけ悪者扱いするかなあ

「ハピネルちゃんこっちおいで」

バカが手を伸ばし金髪幼女、ハピネルは口元に笑みを浮かべ歩いていく。今にも転んでしまいそうな危うい歩き方だ。だがそれが愛らしい。なんともいえない庇護欲に書き立てられるわけなのだが

そう和みながら考えているとトン、と脚が絨毯と床のわずかな段差に引っかかり、前方に銃身がずれる。思わず手を伸ばし矮躯を支えてしまう。

ハピネルは自分の脇の下から伸びている手を見、こちらの目を大きくクリツとした両方の赤い色がこちらの顔を覗き込む。

近くで見据えると思わず息を呑むような可愛らしさだ。腰まである流れるような金髪、整った顔立ちは見るものに美しい、ではなく可愛いという印象を与える。こいつも成長したら美人になるんだろうな。と考えをめぐらす。

ありがとうお母さん、とハピネルは言い黒原のほうにまた危なっかしい動きで歩いていく。

「訂正しましょう、言葉が足りなかったようです。今この部屋の横ではあなたたちの身柄をどうするか議論が行われおり私はその内容を知ることができますから。言い方を変えるならば様々な国の思惑が動く軽い人身売買でしょうか。」

「というわけで大まかな事情は分かってくれたよね諸君。」
祓がそう言って目の前の二人を見る。

正方形の大きな部屋には円卓が置かれており三人が三角形に座っている。部屋を見渡し四つあるうちの窓の一つが大きく割れていることに気づく。その窓は少女たちが隙間風の入ってこないように補修

して始めている。

「まあ大まかなところは理解した。」

白をベースに所々青いラインの入った制服をきた大柄な青年、神機信仰軍代表、一正正・ヴォルフ・天狼くただまさ てんろうがうなずく。銀色に輝く髪を短く刈り込み背は高く大食漢であり見るものに威圧感を与える。

「こちらもだ、だが質問がある。」

残されたもう一人、ヒナ・ライト・ブレイバーは手を挙げる。黒一色の制服のせいで全体的に補足はかなげな様子を見るものに与えるが

「なぜこの様な形にする、貴様等が保護したのだから後々に文章でこういう連中を保護したことだけ言えればいいじゃないか、なぜ私がこんな奴と同席に座らねばならん、不愉快極まりないんだが。」

口を開けば辛辣な言葉を平気で言う少女である。

正正がにらみつけ、盗人風情などと一緒の席になんて着きたくもないと吐き棄て、ヒナもにらめ返し、口論が始まった。

残された祓はというと補修されていく窓ガラスを見て、隣の部屋にいる二人のことを考えていた。ワイズと連絡回線を開いたままにしてあったから二人の説明もできた、まあ話を聞いたワイズの言葉に暴力的なところを否定しない所は少し笑ってしまい二人に怪しい目つきで見られたが気にしないことにしよう、

少なくともこの二人よりは自分はまともだという自信もある。まあそれはいいとして、未だに口論している二人を見て考えをまとめる。

今後の方針と二人をなぜここに呼んだのか説明しなくてはいけない。めんどくさいと言う考えも過ぎるがこうしなければいけない理由もある。

「さておしゃべりはそこまでにしよう、二人とも。ここにきてもらったのは色々理由がある。」

二人は祓の言葉に口論を止めこちらを見据える、二人の目は語る、もたらされる情報が本当に価値があるか、そう問いかける目だ。祓はにこやかな笑顔でその視線を浮かべる。

「さてと、まず簡単な現状確認といこう。三人は棄て穴から発見された、それも無傷でだ、みんなは知っての通りあそこは力を搾り取られた神を捨てた場所だ、あそここの神は人を強く憎んでおり人を呼び込み自殺に導くような穴だ。」

机の中心に長方形が映し出される。空中に浮かび上がる横には安全の文字が浮かんでいる。

「高さはあまり高くない、だが中には小動物や岩を取り込んだ神が多数いて人間を見ると襲い掛かる。金谷や黒原は他にも人がいるかもしれないというのが生存は絶望的だろう。」

二人は言葉にあわせうなずく、何も持たず術も使えない人間があの中にいたら五分ともたないだろう。それは承知の上であり三人がどうして生き残ったか、そこに三人の価値があるのではないのかと考えている。

「まあそんなことはどうでもいい、そこではなく我々にとって価値があるとは彼らが異世界から来たということだ。価値観も違う世界、

技術水準も違い思想も違う。彼らが知っている常識から何か利益が得られるという点についてだ。どうする？誰かが知識を独占しちゃったら後々めんどくさい事になるでしょう、そこでここに集まってもらったんだが。」

「そのことに関してだが我々は保留にしてもらってもいいだろうか」

「じゃあ私たちがもらってもいいのかい？」

正正の言葉にヒナは挑発の意味も込めて笑いかける。
ヒナの言葉に正正は首を振り言葉を続ける。

「そういうことではなく保留ではだめなのか？ということを聞いた
いんだが」

「何故だい？理由を聞かせてもらおう」

「この件は公にたくはない。それが本音だ。この件は事と場合、
事情によっては各国間の問題にもなりかねない。違うか？」

目を閉じ腕を組み考え込む様子を取る正正、その顔には表情がなく
何を考えているのか読み取れない。

「どうするGICS代表？」

「まあほしいといっちゃ欲しいんだが、こちらも保留にしてもいい
だろうか、やっと問題も解決し始めたところなのにまたデカイ問題
に発展してもらっては困る。まあ問題が保留されたからといって接
触が禁止された訳じゃないんだろう？ならば世間話やらでもして関
心を引くことにしよう。」

ヒナは立ち上がり出口に向かって歩いていく。正正も言うことは言ったといわんばかりに立ち上がり窓を目指す。

「天狼君、入るたびに窓を割ってはいる癖は何とかならないか？後で会計から文句を言われるのは僕なんだが。」

「いやなら窓に細工でもしておけ、そう金の亡者にでも伝えて置け。」

正正はそういい残し、直した窓とは別の窓から空に踏み出した。迷いもない正正の行動を幾度となく見てきた光景に何も言えない祓は疲れた風のため息を出す。

「しかしまああえて触れなかったけど洞窟の中で箱につめられた少女か、これもある意味問題なんだがなあ。」

異世界から来た少年少女、箱詰めれた少女、そして割れた窓、どれもめんどくさそうだ。だが、

「面白くなってきた。」

顔を上げた祓の顔には先ほどの疲れはなく、笑みが浮かんでいた。

二話 上（前書き）

長くなったので分割にしました。

二話 上

黒原は一人途方にくれていた。

今歩いてきた道を振り返る。まっすぐに道は伸び脇には様々な店が並ぶ。

前を見る。同じような道が続いている。

「迷ったなオイ」

メイドさんが買い物をするついでに町を案内してくれるといったのでついてきて、町が広く知らないものがたくさんあったことに驚き、テンションが上がりまくったのは覚えている。だがその先のことをよく覚えていない。

「……ふむ、先に行ってしまったのか、全く黒原もまるで子供だな。」

歩きながらも私は考える。

それを言っでは私も子供といえば子供だな、元いた世界では高校一年なんて中学生に毛が生えたようなもんだしなあでも、

周りを見渡せば私と同じ年かそれよりも一つ二つ年下の少年少女が店を切り盛りしているのが見て取れる。

「凄いものだ」

思わず出してしまう本音、実際のところ私は元の世界に戻りたい、と言う考えはあまりない。心残りになるようなものは少ない。家族はいないようなものだ、親は優秀であり妹も才能があった。私は何ができるわけでもない平凡な人間で親から逃げるように一人暮らし

を始めた。

だからというのは理由にはならないのかもしれない、だがあまり帰りたいという気持ちにはならない。普通の人から見れば歪んでいるんだろう。そう私は自嘲しつつ歩を進め、いつの間にか薄暗い路地にたどり着いていた。

考え事に集中すると周りが見えなくなるのは悪い癖だ、そう感じ踵を返し後ろに振り返ろうとし、声が聞こえた。

助けて、と

私は声のする方角に歩いていく、泣き声、脅すような低い声音が聞こえ始める。

角があり声は曲がった先から聞こえてくる。自分に何ができるか、そう囁く自分がいる。だが私はその声を無視し踏み出す。

私の目に入っただのは黒髪少女の周りを取り囲む三人の男。逃げていたが追い詰められたのだろうか、通路はL字型になっており少女の背後に道はない、男たちは少女に何かを言っているのかこちらを向かない、座り込んでいる少女は涙目で私を見る。

私は少し後ろに下がり加速を付けチンピラの一人にとび蹴りを叩き込む。蹴った場所は後頭部、速度を保ちチンピラの頭を壁に押し付け後ろに下がる。

「ハゲ二人と細身がなに少女苛めてんだ、オイ。」

細身が振り返り私をにらみつけ、ハゲ2が私が蹴ったハゲ1を揺さぶり意識を確かめている。

「おいおいどこの誰かは知らねえが何してくれてんだ。こっちは少し商談をやったところなん」

細身がつまらない小物の台詞を言い出し始めた。なんでも俺たちのボスを知っているか？とか色々と言ったらしく言っているが結局

のところ権力をいっぱい持つてから自分は偉いです。

と言いたいだけらしい。聞いても意味がないので地面を蹴り細身にハイキックを入れる。

細身を蹴ってから気づいたのだがもう一人のハゲ2がいない。おかしいなと考える。一本道でありどこにも隠れるスペースはない。通路は広く三人は同時に通れるほどである、だがどこにも隠れるスペースは存在しない。

ふと座り込んでいた少女の視線が気になった。少女の視線は上を向きこちらを見てはいない。上を見るとハゲ2が居た。しかも壁に横向きに立っていた。

「いやいやそりゃないだろ、オイ」

思わず声が出る、神を使うだのという奇天烈な話は聞いた。背中に翼が生えたメイドも見た。洞窟では熊もどきに襲われた。だがあれは本当は夢だったんじゃないのか、と否定する自分が居た。だが目の前には横向きで立っているハゲ2がいる。

ハゲ2がどこから取り出したのかナイフを手を落ちてきた。

ハゲ2はナイフを振り下ろし私は後ろに距離をとりそれをかわす。

「よくも太田さんを」

ハゲ2が敵意丸出しでこちらを見据える。私は右こぶしを握り前に突き出す。見よう見まねではあるしケンカはできない、ついでに言うなら誇れるものと言えば蹴りしかできないし何かを習っていたわけでもない。ようするにノリだ、私は自分に言い聞かせる。ハゲ2が突っ込んで来たら避けて蹴る。作戦はそれしかない。

「うおおおおお」

私は驚いた。ハゲ2の声に身がすくんだわけでもない、ハゲ2が地面を滑るように私に向かってくる、しかもかなりの速度で。

私は相手から距離をとろうと一歩二歩下がるが相手のほうが早い。ハゲ2がナイフをもつ右手を引き力を溜め込むポーズをとり、前に突き出す。

私はある覚悟を決めハゲ2につっこむ、ナイフが眼前に迫り、私はさらに身を低くし頭を地面に近づけ前転した。

「ちっ俺のブリザードロケットをよく避けたな」

「なんだそのダサイ名前」

結果的に私は突きを避けた。ただし色々と埃やら砂まみれになったが。

「だが次は避けられないぞ。ブリザアードロケットオオオ」

ハゲ2がダサイ名前を叫び私に突っ込む。背後には幼女が居て避けれないと考えたんだろう。

先ほどよりも速度が上がった突き、私は当たるか当たらないかギリギリのタイミングでしゃがんだ。ハゲ2の顔に驚愕の表情が浮かび私は右拳を握りしめ、叩きつける。

今度は私が驚く番だった。手ごたえがなく拳は空を切り、いつの間に移動したのかハゲ2が再び突っ込んでくる、顔は喜色にゆがみこちらにナイフが伸ばされ私のわき腹を狙う。

「終わりだああ」

叫びとともにナイフが突き出される。

私は咄嗟にその場にしゃがむ、だがその考えも読まれていたのだ

ろう、ナイフの切っ先が下を向き 私の柔肌を突き刺そうとする。私は周りを見ていいものを見つけた。

それを手元に引っ張り目の前に突き出す。それを見たハゲ2はナイフをあわてて引っ込める。私が盾にしたのは先ほど地面とキスしていたハゲ1だ。私は前に盾となっていたハゲ1を投げハゲ2が反射的に受け止めた。いや受け止めてしまった。

ハゲ2も自分のミスに気づいたんだろう、しまったという後悔が顔に浮かぶ。ハゲ1を受け止める為に立ち止まったことだ。

私は即座に起き上がりハイキックを叩き込んだ。

「ふう、強敵だった。」

私は三人が気絶したのか確かめ一息ついた。

ついでにハゲ二人から財布らしきものをもらっておいた。いや違うんだよ小遣いが欲しかったわけじゃなくて武器がないかどうか確認してたらまたまた見つけてな。自分で言い訳を作る。

さて細身の身体チェックもしなくちゃな。私は細身に近づき上着からズボンまで脱がし財布らしきものを探し出した。

さてと手に入れたお金で幼女と一緒においしいものでも食べるかなあ等と考え小さなやわらかい幼女の手を握り路地を歩いていく。

幼女はそれなりに地理があるらしく美味しい物売ってる店知らないか？と問いかけると私の手をとって歩き始めた。

そのとき私は浮かれていたのだろう、人を助けたことや自分が持っていたものがここでも役に立つという事実。

「美味しかったな」

「でしょう！」

幼女につれられた店のケーキは確かに美味しく非常に満足もでき

た。ハピネルにもお土産を買い箱に包んでもらう。ある程度は元居た世界と一緒にであり私は非常に安心した。幼女の満足そうな笑顔に気持ちや和みこちらまで笑顔になっていく。ああ、そうだな名前を聞かないと、私はそう思い口を開き

「待ちなさい淫魔、その子をどこに連れて行く気ですか。」

背後からの声が私の声を打ち消し邪魔をした。淫魔ねえどっかにエロい人でもでも居るのかな？私は辺りを見渡すがその様な人物はいない。背後を振り返る。巫女がいた。それもたくさん、ずらりと並んでいた。先頭に立つ白髪幼女がえらそうに腰に手を当てているのが見えた。どこにもいない、そう判断し私はもう一度幼女に名前を聞こうとするのだが、

「何で目が合ったのに目をそらすんですか淫魔！」

背後からもう一度先ほどよりも大きな声をかけられる。うるさいなと考え周りを見ると若干周りの人間が私から離れていく。あれ？もう一度は以後を見る。白髪幼女がこちらをきつくにらんでいる。・
・
・
・
あれ？変な考えが浮かんでくるなあ。

「すみません、淫魔って私のこと？」

「しらばっくれても無駄よ、もうすでにあなたは包囲されている、おとなしく投降しなさい。」

叫んでくる白髪幼女のほうを振り返り観察する。真っ先に印象に残るのは腰まで伸びた白髪だ、日に当たるとキラキラと輝きまぶしいくらいだ。そして背中には身の丈を超えるほどの大きな弓、赤い袴と白衣には黒い線が走る。赤い袴には金に輝くフラフープのよう

な大きな輪が二つ取り付けられている。背は他の巫女より低く顔も幼さが強く出て小さく幼いという印象を強くする。キツとこちらを見るその目を見ても怖さは感じられない。

「いや別に私は痴女でもなければドMでもない一般的などこにでもいる可憐な美少女Aなのですが。」

「証拠はそろってるのよ、おとなしくお縄につきなさい。」

「いやいや何を言ってんだよ、証拠なんてどこにもないじゃないか。」

「ふっ他人の目はごまかせても私の目からは逃れられないわよ。」

そう言う少女の目を見る、赤くきれいな目だ。何の変哲もない。私は白髪少女に背を向け少女の手を引き歩き出す。いや普通に考えれば分かること、一般的な格好をしている私と巫女のコスプレをした少女、どっちの言い分が正しいなんて考えなくても分かること。背後でうるさく騒いでいるが私は無視して歩き、

「止まれって言ってるんでしょが。」

一際大きな声とともに足元の地面が吹き飛んだ。

まさしく吹き飛んだと言っている、地面に爆薬でも仕込んでたんですか？と問いかけたくなるほどに、音を立てて土が飛ぶ。

「当たったらどうすんだよ。」

思わず叫んでしまった。確実に当たったら軽傷ではすまない、その痕跡を見て。

「私を無視するほうが悪い。」

「ふざけんなクソロリ」。

私の叫びに白髪少女が肩を震わす。私は畳み掛けるように声を上げる。

「同じ年ぐらいの奴がそばにいるだぞ、当たったらどうする気だよ。この白髪巫女」

「だ」

「だ？」

肩を震わしていた白髪少女が大きく息を吸い込み、

「誰が少女だコラアアア、私は十五歳だああああ」

叫び、弓を限界まで引き伸ばしこちらめがけて打ち込もうとする。私は手を握っていた少女を抱きこみ咄嗟に横に飛ぶ、私の立っていた地点の後方で腹を震わす地響きが起る。

「ここにいて。」

私は抱きこんでいた少女を放し巫女に向き直る。背後には人が大勢、弓での攻撃はできないはず、そう考えていた私の考えはどうやら甘かったらしい。見るとすでに白髪少女は弓を構えこちらを狙っていた。

「マジかよ。」

元立っていた方に全力ダッシュ、轟音がし、一瞬その場においてきた黒髪幼女のこと頭を過ぎる、しかしさらに弓をこちらに向けて白髪幼女の姿を見てその場でしゃがむ。頭の上を何かが通り過ぎ風を感じる。後方でまたも土が飛び音が腹に響く。

「死ねえええええ」

矢が当たらないことに痺れを切らしたのか白髪幼女はこちらに走ってくる。ありがたい。近接戦闘なら何とかなるか、蹴りたくはない。だが蹴らなくてはこちらが死ぬ、そう言う考えが浮かびこちらも距離を詰める。

白髪幼女は袴に取り付けられたフラフープのようなものを両手に持ち振りかぶる。

どうくる？ 輪に直接的な何かがあるのかそれとも輪から何かを召喚するのか？ だが私の予測は結果的に言えばどれも外れだった。

白髪巫女は右手を下げ輪が地面を削る。そして振り上げる。

その瞬間私は見た。何かが地面から出てこようとしている。地面が盛り上がり徐々にそれが地表に姿を現したとき私はその場に立ち止まってしまった。それと同時に私は後悔した。これなら弓のほうがまだよかったと。

地面から現れたのは日本刀だった、白髪幼女が持つ輪から鎖が伸び日本刀の尻の部分につながっており空中にもかかわらずピンと伸びている。そこに関してはどうでもよかった、だが問題は大きさだ。

白髪幼女は自分の身長は四倍はあるだろうその馬鹿デカイ日本刀を軽々と上段に構え、こちら目掛け叩きつけてきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7628q/>

人は神とどうあるべきか？

2011年10月8日15時18分発行